



菜乃葉の失敗

問われたわたしはかたまつた。
わたし、羽村菜乃葉が、学校にも行かずにどうしてこんな時間（じかん）にこんなところにいるのか。

それには深い——深い事情（じじょう）があるのだ。



「なのはちゃん、中学（ちゅうがく）、別々（べつべつ）になっちゃうんでしょ？」
「なのはちゃんって、頭（あたま）いいからな。」

クラスの子にそう言われるたびに、誇らしかった。

わたし、小学校のころは、自分で言うのもなんだけど、けっこうまじめな子だったと思う。

趣味は読書。

先生の言うことも、お母さんの言うこともよく聞いてた。

勉強は好きだったし、テストでいい点を取ると、お母さんがすぐよくこんでくれた。

ほめられるのがうれしくてがんばってたら、いつのまにか中学受験をすることになっていた。

お母さんはよく言ってた。

「あなたには特別な力があるんだから、ちゃんとそれをのばさないと」って。

いい大学に行つて、大人になったら、お母さんみたいにバリバリに働く。

それが「わたしの未来」だって、なんのうたがいもなく信じてた。

受験勉強は本当に大変だったし、まわりの子が遊んでいるときに、ひとりで勉強してるのはやっぱりつらかった。

でも、自分に合った学校に行くためだっと思って思ったら、ぜんぜんがまんできたんだ。

だけど。

「うそでしょ……。」

いちばん行きたかった学校の合格発表で、自分の番号がなくて。

「自分はダメなんだ」って思ったら、実力がだせなくなつて。とうとう受けた私立中学にぜんぶ落ちてしまったんだ。

思い描いていた未来が、ガラガラとくずれていくような気がした。

だけど、人生はきびしい。

受験といっしょに終わってくれることなく、日々はなにごともしなかつたように続いていく。

学校には行かねばならない。義務教育つてやつだ。

だけど、地元の公立中学には小学校のメンバーがそのまま持ち上がる。

あの子たちといっしょに学校に通うの、ぜったいムリだっと思って。

だつて、あの子たち、きつとこう言うに決まつて。

『遊あそばずに勉強べんきょうばかりしてたガリ勉べんなのに、ぜんぶ落おちるとかウケる〜!』

『ぜんぜん大したことなかったってことでしょ？　なのに、えらそうにしてたし、ざまあみろだよね。』

そんな声こえが今いまにも聞きこえてきそう。

いつしよに通かようのなんて、ぜったいできないって思おもったんだ。

「学校がっこうに行いかないって、どういふこと!？」

お母かあさんはお母かあさんで、わたしが特別とくべつでもなんでもなかったことに、わたしよりもシヨックを受うけていた。

悲かなしかったし、申し訳わけなかったけど——でも、それでもムリだった。

「あの学校がっこうだけは、ぜったいに行いきたくない……行いけないよ。」

それにもう、勉強べんきょうだつてしたくなかった。

だつてぜんぶ、なにかもムダだつたってことだし。

わたし、お母かあさんの期待きたいに応こたえられないこともだつたってことだし。

「じゃあ、これからどうするつもりなの！　高校受こうこうじゅけん験けんも、大学受だいがくじゅけん験けんもあるのに、こゝでつ

まづいてどうするの！ 落ちこぼれて、生きていけなくなるわよ！」

中学校に通えないって言い張るわたしと、なにがなんでも行きなさいって命令するお母さんのけんか。

そのとき、見かねたお父さんが、ぽつりと、ある提案をしてくれたんだ。

お父さんの生まれたこの家は、おばあちゃんがいなくなったあと、ずっと空き家になっていた。

人が住まない、家ってどんどん傷んでしまうんだ。

それに、大事な思い出がつまった家だから、お父さん、どうしようかって悩んでたみたい。

いい機会だから、引っ越して、別の学区の中学に行くのはどうかって。

それなら、知ってる人はいないだろうし、バカにする子もきつとしない。

それ、いいかもって思った。

でも、お母さんは大反対だった。

だって、おばあちゃんの家はわたしの家からけっこう遠い。

通勤が大変になるってお母さんは言った。

お父さんはすぐに新しい仕事を見つけてくれた。

でもお母さんは転職はできないからって、ひとりで家に残ることになった。

大好きなお母さんといっしょにくらせなくなるのはいやだった。

でも、これ以上落ちこぼれて、お母さんにガツカリされるのもいやだった。

だから。

わたしは、知らない子ばかりなら、新しくスタートを切ることができるかもと思っ

て、お父さんの提案にのることにしたんだ。

だけど、現実はそんなに甘くなかった。

入学式の日。

わたしは同じ塾だった子を見かけてしまった。

「どうして」って、体がかたまった。

だつてありえない。

知ってる人がいないところまで、やってきたはずだったのに。

「あれえ、羽村さんじゃん？　なんでここにいるの？」

その子に声をかけられたとたん、わたしは思わずその場から逃げ出した。

受験に失敗してここに逃げてきたのがバレるのが、こわくて、こわくて、たまらなくなつて。息がうまくできなくなつて気分が悪くなつて、保健室に行くと、そのまま早退した。

それつきり。

五月になつてもわたし、学校には行けていない。

だれにも会わないようにつて祈りながら、ずっと、この家に閉じこもっているんだ。

